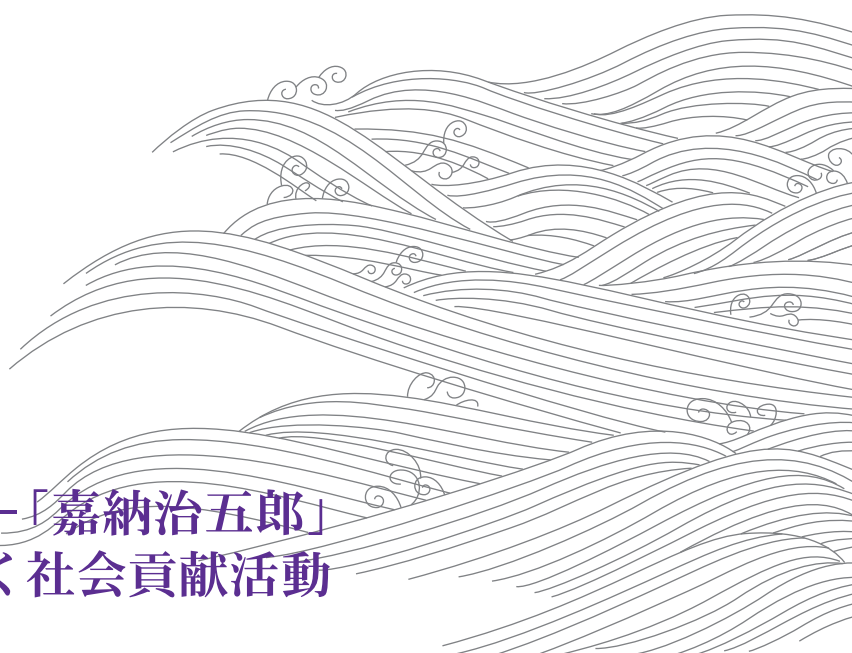


茗溪



特集

- I 現代に求められる人間像—「嘉納治五郎」
- II 茗溪会顕彰 未来をひらく社会貢献活動

グラビア：01

特集I 現代に求められる人間像

「嘉納治五郎」：02～08

嘉納治五郎先生、

孔子祭典行事の復活に際し、

委員長として指揮を執る

守屋 正彦

嘉納治五郎に寄せたIOC委員の尊敬

真田 久

嘉納先生のレガシーを

どう受け継ぐべきか

阿江 通良

特集II 茗溪会顕彰

未来をひらく社会貢献活動：09～14

茗溪学園だより：15

支部組織表：16～17

葛飾支部勉強会から：18

桐の葉のつどい：18～19

季刊誌「茗溪」などを確実にお届けしたい！：20

追悼録：21

著書紹介：21

本部だより：22

編集後記：22

meikei

秋
2010
No.1067

現代に求められる人間像 「嘉納治五郎」 P.2～8 参照



第10回オリンピック・ロサンゼルス大会でIOC委員の
行進、右手前に嘉納治五郎委員が見える 1932年



嘉納は孔子祭典を復活した。
湯島聖堂内陣の孔子像及び四
配像（顔子、曾子、子思、孟子）



《歴聖大儒像》
東京教育大学附属図書館蔵書印



《歴聖大儒像》筑波大学に所蔵されている6幅のうち。
下は蓋で、孔子祭典会委員であった中山久四郎によ
る解説文が添付されている。



茗溪会
顕彰

未来をひらく社会貢献活動

写真は左上から筑波大学ライフセービング部／相模人形
芝居／鹿児島破魔投げ保存会 右上からボリビアに養護
学校／中国大陸の砂漠に緑を／高齢化社会をよくする虹
の仲間手作り工房／病院で似顔絵 中段左上から平塚農
高のヤーコン／カンボジア地雷被害の子どもたちのため
に／パラリンピック走り高跳び／柳川に菖蒲園／浅草寺
の大草鞋／北海道静内農高の桜並木保全／子どもたちと
作る絵本教室／ほのぼの寄席で福祉施設巡回／グリーン
プロジェクトで芝生づくり／山形「くれよん」地域活動
／佐野常民記念館ボランティアスタッフ

P.9～14 参照

現代に求められる人間像——

「嘉納 治五郎」



NBCからインタビューを受ける嘉納治五郎(左・1936年)



子どもを指導する嘉納治五郎

嘉納 治五郎

嘉納治五郎は、万延元年(1860)10月28日兵庫県で生まれた。母親が病没の翌・明治3年に父親と共に東京に出て勉学に励む。東京大学を卒業。明治期から昭和期にかけて、学習院教授、第一高等学校校長や三度にわたり東京高等師範学校長を歴任する等、優れた教育指導者として活躍した。

明治中期には諸外国から多数の留学生を受け入れ、また、湯島聖堂の孔子祭典を復活させた。

一方、講道館柔道の創設者として、数回にわたって欧米を回り、柔道を世界のスポーツとするための基盤作りを力を入れた。また、柔道のみならず、多くのスポーツの普及に努めた。

明治42年(1909)には、日本最初の国際オリンピックク(IOC)委員となり、2年後には大日本体育協会を組織した。

翌年、日本の初参加となった第5回ストックホルム大会では団長として入場行進した。

後に、結局は戦争のために返上したが、第12回オリンピック大会(昭和15年・1940を予定)の東京開催を再確認したカイロ会議からの帰途、横浜到着2日前、乗船していた氷川丸の船中で肺炎により逝去した。

昭和13年(1938)享年77歳。

はじめる

今日、人間社会のグローバルな現象としての「情報化」の進展は目覚ましい。情報世界が拡張する一方で、情報の伝達や処理に要する時間や手間が、本能的には著しく短縮され、そのことがまた、情報世界の進展を助長する。例えば、国政選挙時の開票速報。開票率がまだ一桁台の低い時点で次々と「当確」が打たれる。そして、結果としてこの「当確」はほぼ一〇〇%的中しているのである。これは投票所における「出口調査」のおかげである。一昔前とは違って、支持政党や候補者をはっきり決めるに投票日を迎える、いわゆる無党派層が過半数を超える今日、事前の取材を密にし、精緻なコンピューター・プログラムを用意しても、予測の精度はほとんど上げられない。「出口調査」はこのジレンマをほぼ全面的に解消する効率的な手段なのだが、取得されたデータの確実性とひずみの少なさが担保されてはじめて、処理結果の精度・信頼性が確保できるのである。

情報の一方通行

現代社会がITシステム時代といわれて久しい。インターネットの目覚ましい拡張はIT時代を短期間に発展させたが、入力されているデータや情報への信頼性が確立されていないと崩壊の危険性もはらんでいる。インターネットの世界で、ブログといわれたりツイッターといわれる行為が日常化しているが、発言内容も受容の仕方も正常なコミュニケーションと見なしてよいか疑わしい。時には、その内容、情報によって、甚だしく名誉を傷つけられたり、公開しがたいモラルに反した不健康なものもある。

あるいは、成熟しない独りよがりの「自己主張」が表現の自由という美名に隠れての独り歩きとも受け止められよう。それは孤立、孤独にある者が単に集合している場での出来事なのではないだろうかと思える。ちょうど、体が触れあっている、隣人意識のないラッシュユアワーカーの電車の中の人間関係に似てはいないだろうか。

嘉納治五郎先生、

孔子祭典行事の復活に際し、 委員長として指揮を執る

守屋 正彦

(筑波大学人間総合科学
研究科教授(日本美術史))



ることになって来て形式を探ることが昔より余程少なくなつた、また道徳は宗教と云うものと離れて存在してきたやうな形跡があるのです。欧羅巴の道徳はキリスト教が元で養はれたものと見ざる

を得ないのでありますから、今日欧羅巴に行はれて居る道徳は基督教を離れて道徳は獨立に存在せんとしつゝ、ある傾きがある」とし、「其の意味から考へると孔子の教がさう云ふ学説や各宗教を離れた一般的の道徳に一番近い孔子の教を以て養はれた所の徳教を奉じて居る人であるならば、其格段なる宗教格段なる学説を離れた所の道徳と殆ど同じやうな考を以て見ることが出来る」(『足利学校積奠講演筆記』第3巻4〜5P、足利学校遺跡図書館1914年)という意見であつた。

孔子祭典の復活

湯島聖堂には師範学校に付設された教育博物館があり、聖堂の祭具はその多くが浅草文庫(のちの内閣文庫)に保管されていた。

時が経ち、1903年に東京高等師範学校が大塚に移転したのを機に孔子祭典の話が持ち上がった。明治三十九年に至り、當時聖堂を管理した東京高等師範学校の職員の有志で、積奠の禮が久しく欠けていることを遺憾とする者が多く、孔夫子を崇敬し、我が国における其の教化を感謝する誠意をあらわすために、その祭典を大成殿で行うことを計画したが、さらに廣く同志を集めて祭典を盛大に行うことを議決し、「孔子祭典會」が創立されるに至つた。(鈴木三八男編『聖堂物語』より引用)

時に1907(明治40)年、「發起人會を開き、文學博士

大切なものを見失わない

まだ「IT時代」の幕開けともいえる時代にあつて、「明日に向かう」人間社会の中で、これから真剣に考えていかなければならない課題―それは効率化やシステム化を性急に求めるあまり、相手を否定することを「競争」と捉え、共存のあり方をないがしろにし、人間的な触れ合いや「こころのつながり」を置き去りにするといったひずみを矯正し、あくまで人間とその幸せを目標に捉えた方向へと人間社会の進路を導くことであろう。

大きな変革・交換の時代は否応なしに従来のモラルや価値観を揺るがし、人々は往々にして伝統あるものをただ「古い」というだけの理由で廃棄し、新しいものへは新奇さだけをよすがに無条件にすり寄っていく。時代のめまぐるしい変換の中で価値あるものを見失わず、信念をもつてよりよい未来を開拓してくれるのは優れたリーダーの存在であり、それを生み出す人間教育であろう。

幕藩体制に見る 指導的人材育成の理念

「下剋上」とさえいわれていた戦国時代は、卓越した戦国武将が指導者たちによつて整備され、その結果、幕藩体制という、国家の新しい支配体制が整い、以後、外国船の訪れる幕末までの二百数十年の太平の世を迎えることとなつた。その間、国家の経営組織は幕府全体統制のもと、それぞれの分国において優れた指導者たちによつて治められていた。その指導者たちは、それらの分国に置かれた子弟の教育機関において次代の指導者を育てた。中央においても、幕藩体制を支える次代の指導者となる子弟が育成されており、その機関も常設されていた。駿河台の昌平坂学問所がそれであり、その指導理念としての儒学の師・孔子を祀る湯島聖堂がそこにある。

明治新政府は、たとえ体制が変わろうとも、近代日本の指導的人材の育成の場として、伝統ある昌平坂学問所(昌平黉)の跡に、官立による師範学校を設立したのである。若溪の創基が見られるところである。

斯文学会しぶんの成立と 嘉納治五郎の徳教

「斯文学会は、明治十三年岩倉具視が、欧州から帰り、国家の前途を憂慮し、儒教によつて堅実な思想を養成し、国家の基礎を固めようとして創立された。『財団法人斯文学会八十年史』。その動向は、東京大学文学部哲学政治学理財学科の学生であつた嘉納治五郎に影響し、漢学塾の二松学舎に通つている。欧化偏重の当時の在り方に対して、東洋思想、儒教精神を学ぶ理由と見てよいであろう。彼の語る所によれば、「基督教は基督教の精神を探

井上圓了、同井上哲次郎、…男爵細川潤次郎、…子爵谷干城、…男爵澁澤榮一、伯爵土方元久…ら、二十人を評議員とし、…中略…十人を選挙し、嘉納治五郎を委員長とした」(前掲『聖堂物語』より引用)のであった。

この時、大成殿は孔子並びに四配像、それに「賢儒像」の扁額16面、さらに「歴世大儒像」6幅(筑波大学所蔵)により、かつての旧観に復し、所謂、祭典の中心たる行事、孔子に蔬菜を捧げる「釈奠」の儀が行われたのである。

これこそが孔子祭典行事であり、礼拝空間の荘厳から式次第のすべてを嘉納治五郎が再現したのであった。以来1920(大正9)年まで、嘉納治五郎は祭典部長であった。

■孔子祭、その後

1923(大正12)年の関東大震災によって、湯島聖堂大成殿は灰燼に帰した。以来、2006(平成18)年まで、朱舜水将来の孔子像によって、「釈奠」の儀が行われた。2007(平成19)年10月6日、孔子祭復活100年を記念して特別展「草創期の湯島聖堂」が、史跡湯島聖堂を管理する財団法人斯文会と国立大学法人筑波大学の共催で、湯島聖堂大成殿を会場に開催された。震災から80有余年を経て、高等師範学校から筑波大学に保管されてきた朱子(朱熹)ら「歴世大儒像」の宋儒六幅が掛けられ、筑波大学人間総合科学研究科柴田良貴教授によって復元された「孔子ならびに四配像」が拝殿に安置され、藤田志朗教授指導のもと、日本画研究室によって復元された「賢儒像」扁額16面が殿内につけられ、まさに、孔子祭を復活させた百年前の嘉納治五郎の思いが、常設の礼拝空間として甦ったのであった。

古代からの文化交流の証として、日本における孔子を祀る具体的ななかたち。1922(大正11)年、湯島聖堂は国の史跡に指定され、その文化は継承されることとなったのである。

《歴世大儒像》について

『歴世大儒像』(狩野山雪筆・全二十一幅)は、寛永九(1632)年に、儒者林羅山によって制作された。

『歴世大儒像』は、湯島聖堂(昌平坂学問所)にあったものが、明治期に入って同学問所の廃止にともない、現在は東京国立博物館、筑波大学附属図書館に分蔵されている。このうち六幅は前身諸学校を経て、筑波大学に継承、所蔵された。

この六幅は、かつて釈奠(関係儀式)の際にのみ湯島聖堂大成殿の奥の壁に掛けられていた。

この六幅の裏面には「朱子」「周子」などと書かれ、下に「浅草文庫」印が捺されている。

浅草文庫とは、わが国初の公共図書館で、明治七(1874)年から明治十四年まで浅草南蔵前にあった。

明治期に入り聖堂の祭礼は廃止されたが、明治三十九(1906)年、東京高等師範学校(筑波大学の前身)の教官たちを中心に「孔子祭典会」が創設され、翌年から毎年四月、釈奠の儀式が行われることになった。

『孔子祭典会会報』には、その際、帝室博物館(現在の東京国立博物館)および東京高等師範学校、東京女子高等師範学校から「禮器祭器」や「器具」(「歴世大儒像」六幅だったと思われる。)を借り出していたことが記されている。

『歴世大儒像』は、東京国立博物館や筑波大学という、いわば湯島聖堂(昌平坂学問所)を母胎として創立された各機関に、一幅も散逸することなく伝えられた。

このようなことは、幕末から明治という体制の大激変期と思ひ合わせると、あるいは奇跡的とも言えるよう。

筑波大学大学院日本芸術史研究室客員研究員
中根恭子「筑波大学所蔵《歴世大儒像》について」から要約

近代日本を支える中等教育の、指導的人材の育成に尽力した嘉納治五郎の意図したもの

明治中期にあつて、中等教育や師範教育の指導的人材育成のために、三度も高等師範学校の校長を勤めたり、体育教育の新しい仕組みを実行に移したりと、精力的に近代教育の方向性を求めた嘉納治五郎の優れた業績は各方面に見られる。その中でも、嘉納の優れた国際感覚は特筆に値しよう。

明治中期の日本が明治維新を経て「近代化」の遅れた国家を、欧米の列強に追いつき追い越せと息せききっている時に、嘉納は、高等師範学校の責任者として諸外国から数千人の留学生を同校と留学生を受け入れるため嘉納が設立した宏文学院に受け入れた。しかも、数年前まで戦争をしかけていた隣の清国の若者たちを多数、迎えたのである。

勿論、彼等はその後の各国の指導者になるのである。しかも、嘉納は、特に中国の留学生に対しては、わが日本人と、理念、思想を共有するために、共に学ぶキャンパスにある聖堂に祀られた「孔子」の祭典を復活させたのである。これは単なる「国際交流」の域を超えていることと言えるのではないだろうか。

このように「自他共にあり、共に栄える」という思想・理念が国際社会に広がった時、嘉納は、アジアで最初のIOC委員となり、終生その役割を果たすことになる。また、オリンピックという国際場裡にも活躍の輪を広げることになったのだと思われる。

このような嘉納の思想・理念と行動こそが、近代社会の指導的人材育成の必要性を叫ぶ彼の発言の根拠として多くの共感を得ることになったのではなからうか。

そして、明治・大正期に互り日本を襲う恐慌や天災の中、幾度となく迫られた「高師廃校」の荒波をくぐり抜けて、新しい時代の指導的人材の育成に尽力した嘉納のシルエットが、力強く浮かび上がってくるのである。

嘉納治五郎に寄せた

IOC委員の尊敬

真田 久（人間総合科学研究科教授）



めに費やした永年の労苦に対する報酬であった」

・デイム（ベルリン大会事務総長、ドイツ）
「氏とは1913年

3年以來の親しい知友で全く感概無量である。氏は世界で稀にみるスポーツ教育の総合的人格者であり、氏の逝去は日本にとってばかりでなく、世界スポーツ界、教育界にとって痛惜に堪えない」

・ブランドー（IOC委員 アメリカ）

「嘉納氏は立派な『サムライ』であり、典型的教育家であり、そのスポーツ界に対する貢献は長く追憶されるだろう」

・ピエトリ（IOC委員 フランス）

「氏は永年の私の親友である。氏はカイロ総会で最大の難事とされていた東京・札幌両大会獲得のため非常な過労を強いられ、ほとんど独力でこの難関を克服していた。日本国民は氏の真摯なしかも勇敢な努力に対して深く感謝しなければならない」

・アバーデア卿（IOC委員 イギリス）

「私にかかる素晴らしい人物に会った喜びを記憶から消し去ることはしまい。かつて当時七五、六歳であった氏が、わずか一分足らずの間に氏よりもずっと年若い人を投げ倒し、出席者一同、氏の勇氣と熟練とを賞賛した事も忘れ得ない。私は氏の遺志に従い、日本におけるオリンピック競技会を支える事を最大の幸福と考える」

・クリンゲベルグ（IOC技術顧問 ドイツ）

「今回の嘉納氏の最後の欧州訪問はオリンピック精神に合致したものだ。カイロ会議では非常に困難に直面したが、氏は巧みに、また自信を持ってこれを執り裁き、オリンピックの東京招致を確実にした。氏の残したものの、すなわち東京オリンピックを成功させることは氏を尊敬する者の義務である」

・平沢和重（嘉納と氷川丸に乗船した外交官）

「あと二日で横浜だということまで来て急逝された先生の今わの心境を思う時、万感こもも至らざるを得ない。奇しき縁で先生の輝かしき八十年の生涯の最後の十一日間というものを文字通り起き伏しを共にした私は、そして今こうして御遺骸の安置された隣室で思いをその走るままにしたためている私は、心から東京オリンピックの成功を祈らざるを得ないのである」

嘉納治五郎は柔道創設のみならず、長距離走や水泳の普及、そして1936年のIOC総会で、1940年のオリンピック開催地に東京を決定させた。しかしながら、その後の大陸での戦争が泥沼化し、東京開催は不可能との憶測がIOCに広がる。そうした中、1938年のIOCカイロ総会に出席した77歳の嘉納が、「オリンピックに政治などの影響がおよんではならない」と主張し、委員たちを説得した。嘉納が言うのだから大丈夫、との思いをもつ委員は多く、最終的に東京開催が再確認された。嘉納は教育家、柔道家として信頼されていたからだ。嘉納はカイロ総会の後、欧州と北米を回って旧知のIOC委員に東京支持の礼を述べ、バンクーバーから氷川丸に乗って帰国の途につく。横浜到着の二日前、不幸にも船上で肺炎のため逝去する。その日のニューヨーク・ヘラルド・トリビューン紙は、写真入りで70行にわたって嘉納の功績を称えた。また、訃報を知ったIOC委員たちは驚きとともに次のような哀悼の意を表した。（出典は雑誌『柔道』一九三八年八月号）

・ラツール伯爵（IOC会長、ベルギー）

「嘉納氏は真の青年の教育者であった。我々は氏の想い出を永く座右の銘として忘れない。あたかも兵士のごとく氏は自己の義務を遂行しつつ逝った。しかし氏はもともと永く生きて生涯の夢であった東京オリンピックを見るべきであった。この東京オリンピックこそ、氏が日本のスポーツを今日の高き水準に引き上げるた

1940年オリンピックの東京開催は、嘉納に対するIOC委員たちの信頼と尊敬の証であった。残念なことに嘉納の逝去二ヶ月後に、東京市は大会を返上した。嘉納を尊敬していたIOC委員たちは嘆くが、やがてブランドーはIOC会長になり、1964年の東京開催を支持する。彼は、嘉納や岸清一（日本体育協会第二代会長）のスポーツに対する考えに触れたことで、日本での開催を支持するようになったと述懐している。古くからのIOC委員たちも、嘉納との思い出やエピソードを東京の関係者に喜んで話したという。氷川丸の船上で嘉納の最期をみとった平沢は、1959年、ミュンヘンでのIOC総会で東京招致の最終演説を行い、オリンピックが日本の学校すべてで教えられていると国語の教科書を手にとって力説した。教育を重視した嘉納の思いが胸中にあつたに相違ない。フランスのIOC委員ピエトリは、柔道の1964年大会への導入めざしてIOC委員たちを説得し、その実現に力を尽くした。日本人初のIOC委員嘉納治五郎は、かように世界の人物から尊敬を集めていた。それは日本の優れた文化と思想を世界に発信し、実践し抜いた教育者であったからである。

嘉納先生のレガシーを どう受け継ぐべきか

阿江 通良（体育専門学群長）



び教職教養科目は非常に充実し、著名な先生方から格調の高い指導を受けた、東京高等師範学校卒業後に学んだ東京文理科大学には最先端の研究・教育施設および研究・教育体制が整っていた、体

傾向のある日本の修行精神をよしとしなかったと考えられる。国際人、嘉納先生のことであるから、日本人が自己の外、さらに日本の外に目を向けることが大切だと考え、「世界の共栄のためにエネルギーを有効に使え」と教えたと解釈することには無理がないであろう。嘉納先生は、留学生を当初は私塾（宏文学院）で受け入れ、1899年以降、高師にも受け入れた。100年以上前であるから、留学生の受け入れには想像を絶する困難や問題があったようであるが、嘉納校長の基本的な考えは、他者に善隣を尽くしてこそ、自国も自身も繁栄する、というものであった。

本年（2010年）は嘉納先生の生誕150周年に当たる。筑波大学において嘉納先生の生誕150周年記念事業を行い、教育者として、国際人として、未来を見据えて行動した嘉納先生の考えや足跡を振り返ることは、本学の進むべき方向、目指すべき人材やその育成のあり方、さらに世界における日本の役割などを考える契機となるであろう。

ここでは、教育、研究、国際交流、体育・スポーツに関わる嘉納先生の業績から、われわれが嘉納先生のレガシーをどう受け継ぐべきかを考えてみたい。

国際レベルの研究大学へ

嘉納先生が改革に全力を注いだ東京高等師範学校、そしてそれを母体として1929年に開学した東京文理科大学の雰囲気とはどのようなものだったのであろうか。

著者の恩師である金原 勇先生（筑波大学名誉教授、2010年3月逝去）は、その著書「二十世紀体育への提言」（不昧堂出版、2005）の中で東京高等師範学校

の体育科や東京文理科大学の教育研究に言及している。金原先生は、体育科で受けた専門教育における体育観に

ついて「嘉納治五郎先生の影響の著しい人間形成志向の強いスポーツ型体育観に位置づけられる」と述べ、体育

実技の授業時間が多かった、現在のように体育・スポーツ学にわたって本格的講義ができるほど知見は蓄積され

ていないため体育・スポーツに関する専門的講義が少なかつたと当時を振り返っている。しかし、一般教養およ

育・スポーツの研究という視点からみても大学院大学という風格を備えていたと述べている。これらのことは、嘉納先生の影響のもと、高度な研究と教育が実践され、優れた人材育成の伝統ができつつあったことを示している。

嘉納先生は「——高等師範学校の教授たるものは、知識技能の上からよほど高い教育を受けた人でなければならぬ。外国のまたは日本の大学、或いはそれ以外でも、ともかく相当の教育をうけ実力を具えたる人が必要とする」という信念のもとで、優秀な教授を集め、東京高等師範学校における教育および研究の水準を高めることに努めた。そして、東京高等師範学校から東京文理科大学に昇格させる基礎をつくり、深い学識をもった指導者を養成し、教育者のみならず、多くの著名な研究者を輩出する基盤を作った。筑波大学は、国際レベルの研究大学となりつつあるが、これは嘉納先生のレガシーを引き継いだと言えるであろう。

「精力善用・自他共栄」と国際性

柔術、剣術をはじめ、日本の伝統的身体技芸の世界には、技芸よりも自己の精神や人格の陶冶を第一とする考え方があり、そのため気持ち自身が自己の内的完成のみに向き、自己の外、つまり社会、国、世界に向くことが少ない傾向があるようである。嘉納先生はこのことをよく知っており、日本の伝統的柔術を基本にしたが、内に向く

多くの中国人留学生が東京高師で学び、北京大学や北京師範大学の教員はじめ、中国の学術界や教育界に巣立っていった。嘉納先生が受け入れた留学生数は、宏文学院と東京高師で約8000人になり、作家の魯迅、田漢や毛沢東の師となる教育者、楊昌濟も宏文学院や東京高師出身であった。

体育・スポーツの伝統

教育家としての嘉納先生は柔道に教育的効果・価値を見出した。「柔術のため身体の健康の増進するにつれて、精神状態も次第に落ち着いてきて、自生的精神の力が著しく強くなつて来たことを自覚するに至った。また柔術の勝負の理屈が、幾多の社会の他のことがらに応用の出来るものであるのを感じた。

さらに、勝負の練習に附随する知的練習は、何事にも応用し得る一種の貴重な知力の練習なることを感ずるに至った。もとより方法としては、在来教えられきた方法そのままではよいとは思われないが、相当の工夫を加えるにおいては、武術としてのほかに、知育・体育・徳育としてまことに貴重なるもののあることを考うるに至った。」と述べ、後に講道館柔道を創設し、柔道を通した人間教育を推進した。

また、柔道、長距離走、水泳を全学生に行わせるとともに、東京高等師範学校の校友会会長として課外活動を奨励したこともあって、様々なスポーツを学んだ東京高等師範学校卒業生（体育科のみではなく）が全国に赴任し、スポーツを全国に広めた。

筑波大学体育の原点である体操伝習所が明治11年（1878）に設立されてから130年以上になる。体操伝習所、東京高等師範学校、東京教育大学そして筑波大学とその伝統は引き継がれ、筑波大学体育は我が国の体育・スポーツ界をリードしている。この間に人々の体育・スポーツに対する考え方、さらに体育・スポーツを取り巻く環境は徐々に変化してきた。力や技を競うことの素晴らしさ、体育・スポーツから得られる健康や楽しさに加えて、人や環境とのコミュニケーションの獲得、さらに地域間や国家間の交流、社会や経済の活性化など、これまで人々にあまり知られていなかった体育・スポーツのもつ、計り知れない価値が認識されるようになった。

本学において春と秋に開催されているスポーツデイは開学以来の伝統であり、嘉納先生の描いた理想には遠いものの学内スポーツは盛んである。これらはまさに柔道をはじめとする多くのスポーツを全学生に行わせ、「運動会」、「校友会」を作って全学を挙げてスポーツに取り組むことを奨励した嘉納先生のレガシーを自然に引き継いだものとなっている。このことは、スポーツが教養の一つと言われる現在において教養教育という点からも極めて意義のあることであろう。

世に貢献できる人材育成の大学へ

嘉納先生は、教育は日本において最も重要なことの一つであるという強い信念から教育者の道を選んだとされている。そして、教育界には第一流の人物を配すべきで、そのためには師範学校および師範教育の水準は最高であるべきだと考え、改革に全力を傾けたのであろう。そして、「教育者自身が教育の大事なることを信じ、教育を通して国家社会に働いてこそ教育者の活動も有意義である」としてその思いを「一世化育」の書に残している。

教育のこと、天下これより偉なるはなし

一人の徳教、広く万人に加わり

一世の化育 遠く百世に及べり

「精力善用・自他共栄」および「一世化育」は嘉納先生の理念を最もよく表現したものであろうが、次の五島慶太（東急コンツェルン創始者）の回想は、高遠な理念の裏に嘉納先生が不屈の精神を持っていたことをうかがわせ、興味深い。

五島は東京高等師範学校在学中に嘉納校長の修身科の講義について「――はじめからしまいまで『なあにくそッ』の一点張りで、ほかのことはなにも説きやしない。」「先生は、力の善用をも説かれて何事にも決してムリを強いられなかった。ムリとムダとは柔道でももつともいましめるところであるが、『なあにくそッ』の闘魂とはまた別である。人生の妙用はこの二つがびつたり結びつくところにあるともいわれた。」と述べている。このことは、嘉納先生が極めて合理的な生き方を説いたが、そのうらに不屈の精神がなければならぬことを教えるようにしたものであろう。

筑波大学は、高度な研究活動に裏打ちされた、あるいは高度な研究に従事した教員が学生・大学院生とともに学びながら、教育できる場でなければならぬであろう。しばしば、すぐれた研究者はすぐれた教育者であると言われるが、これはすぐれた研究者はすぐれた教育者になれる可能性があるという解釈すべきであり、すぐれた教育者になるには嘉納先生の説く化育の重要性を強く認識する必要がある。そして、筑波大学の全構成員が教育と研究の両面において世界に貢献するという気概を持つことによつてはじめて、嘉納先生が筑波大学に残したレガシーを受け継ぎ発展させて新たな伝統を築くことができる。いま、「やり残したことも多々あるが、私は幸いにも世界に多少の貢献ができた。筑波大学は開学後37年になるが、今はまだ道半ばである。君たちはもつともっと精進したまえ」と嘉納先生がわれわれを激励してくれているように感じられる。

文獻

嘉納 治五郎…私の生涯と柔道、人間の記録②、

日本図書センター、第3刷、2006。

きりぶち 輝…新装世界の伝記9 嘉納治五郎、

ぎょうせい、新装第3版、2007。

金原 勇…二十一世紀体育への提言、不昧堂出版、

2005。

嘉納治五郎生誕100周年記念

事業委員会からのお願い

委員長 筑波大学長 山田 信博

文化勲章受賞者である朝倉文夫氏制作の嘉納治五郎先生の肖像彫刻は前身校である東京高等師範学校、東京文理科大学、東京教育大学等の同窓に親しまれてきました。ここに改めて、筑波大学に嘉納治五郎先生の肖像を設置することは、同窓、若き学生諸君、教職員にとつても先哲として畏敬すべき本学の誇りを、見える形で学内外に示すことになります。

嘉納治五郎先生の肖像設置のための経費については、多くのご意見をいただきましたが、東京高等師範学校、東京文理科大学、東京教育大学、そして筑波大学の同窓、学生、教職員からの募金や趣旨にご賛同いただいた方々からの寄附金によるのが最も望ましいとの結論に至りました。つきましては、嘉納治五郎生誕150周年記念事業に対する格段のご協力、ご支援をお願いいたします。なお、肖像の除幕式は、先生の誕生日（新暦）にあたる2010年12月10日に行う予定です。

◆募金について…1口（5000円）以上

「茗溪」の夏号（1066号）にパンフレットとともに同封いたしました振込用紙をお使いいただくか、左記の郵便振替あるいは筑波大学ホームページのクレジットカード決済の画面（<https://futureship.sec.tsukuba.ac.jp/index.html>）をご利用ください。

口座記号番号 0010001317079003

加入者名…国立大学法人 筑波大学

注…通信欄には、「嘉納記念事業」とお書きください。

なお、募金していただいた方のお名前をパネルに刻まさせていただきます。

茗溪創基・嘉納治五郎関連略年表

万延元年(1860)	嘉納治五郎、兵庫県御影村に生まれる	36年(1903)	湯島から大塚にキャンパスを移転
明治2年(1869)	嘉納の母、病没す	37年(1904)	日露戦争始まる
3年(1870)	嘉納、父とともに上京し、漢学、書、語学を学び始める	40年(1907)	外国人特別入学規定細則を定める 清国からの留学生急増 嘉納、東京高等師範学校における孔子祭典を復活させる
5年(1872)	わが国初の官立教員養成機関として東京・お茶の水(湯島聖堂、旧昌平坂学問所跡)に師範学校設置。 茗溪創基。 学制を制定(学区制、義務教育制)	42年(1909)	嘉納、アジア初のIOC委員に就任(48歳～終身)
6年(1873)	仙台、大阪両師範学校設置に伴い東京師範学校と改称	44年(1911)	嘉納、大日本体育協会を設立して初代会長に就任(50歳～1921まで)
8年(1875)	嘉納、官立開成学校入学、フェノロサに師事	45年(1912)	嘉納、第五回オリンピックストックホルム大会に日本代表団長として参加(51歳)
10年(1877)	官立開成学校は東京大学となり、嘉納、文学部第一年に編入 柔術を学び始める	大正4年(1915)	第一回全国中等学校野球大会開催 東京高師に体育科設置
11年(1878)	体操伝習所開設	7年(1918)	大学令(単科大学、公私立大学認可)高等学校令
14年(1881)	嘉納、東京大学文学部政治学及び理財学を卒業し、道義学及び審美学の選科入学(翌年卒業)	11年(1922)	臨時教員養成所創設(昭和23年まで) 嘉納、講道館文化会を設立し「精力善用・自他共栄」の考えを発表
15年(1882)	講道館設立 茗溪会創設	12年(1923)	関東大震災
16年(1883)	東京茗溪会雑誌第一号発行	昭和4年(1929)	東京文理科大学創設 東京高師を附設
18年(1885)	東京女子師範学校を吸収合併、女子部が発足	8年(1933)	大塚キャンパス前に茗溪会館開館
18年(1885)	体操伝習所が東京師範学校付属体育伝習所となる	12年(1937)	東京帝国大学附属農業教員養成所廃止 東京農業教育専門学校を創設 日中戦争始まる
19年(1886)	師範学校令、小学校令、中学校令公布 付属体操伝習所を廃止、体育専修科を設置 東京師範学校を母体に高等師範学校創設	13年(1938)	嘉納治五郎、肺炎のため逝去(77歳)
23年(1890)	女子部が女子高等師範学校として独立(茗溪会員のうち女子部が分離桜蔭会を創設)	15年(1940)	傷痍軍人中等教員養成所創設(昭和19年まで)
26年(1893)	嘉納治五郎(32歳)が高等師範学校長に就任(第一期～1897年まで)	16年(1941)	東京・幡ヶ谷に東京高等体育学校を創設
27年(1896)	日清戦争始まる	19年(1944)	東京高等体育学校が東京体育専門学校となる
29年(1898)	高師に学生スポーツの奨励めざして「運動会」を設置 嘉納、清国からの留学生を引き受け始める	20年(1945)	特設中等教員養成所創設(昭和23年まで) 太平洋戦争終わる
30年(1897)	嘉納、再度、高等師範学校長に就任(第二期～1898年まで)	21年(1946)	アメリカ教育使節団報告書発表
32年(1899)	東京・駒場の東京帝国大学農科学校(のちの農学部)内に農業教員養成所設置	22年(1947)	新学制改革による学校令の制定
34年(1901)	嘉納三度目の高等師範学校長に就任(第三期～1920年まで) 嘉納、高師の「運動会」を「校友会」に改める	24年(1949)	東京文理科大学、東京高等師範学校 東京農業教育専門学校、東京体育専門学校を合併して東京教育大学を創設
35年(1902)	広島高等師範学校設立に伴い東京高等師範学校に改称	48年(1973)	茨城・筑波地区に筑波大学開学
35～36年	財政緊縮 行政整理のため高師廃止論が台頭	53年(1978)	東京教育大学閉学 各附属学校が筑波大学へ移管
		平成7年(1995)	阪神淡路大震災 東京・大塚の茗溪会館敷地内に新・茗溪会館建設 開館
		14年(2002)	茗溪創基百三十周年 茗溪会顕彰事業を始める 図書館情報大学・筑波大学統合
		15年(2003)	筑波大学開学三十周年
		16年(2004)	筑波大学が国立大学法人になる
		22年(2010)	嘉納治五郎生誕百五十周年
		23年(2011)	日本体育協会創立百周年
		24年(2012)	講道館創立百三十周年

茗溪会顕彰

未来をひらく
社会貢献活動

ちろ（囲炉裏）を囲んで子どもたちに語り（鹿児島）

茗溪会では、2002年（平成14）から茗溪創基130周年を記念して顕彰事業を始めた。今年で9回目を数える。その間、顕彰事業のあり方は、その対象や内容について、回を重ねるごとに定まっていた。

当初は、顕彰対象としては、「人材育成功労者」と「青少年社会貢献功労者」の二つの部門を設けてスタートしたが、4～5回目頃からは、「社会貢献活動」に一本化して取り上げるようになった。

青少年の社会貢献活動を最初に取り上げたのは、第1回目の顕彰で、山形県西川町の中・高校生たちが20年以上にわたって受け継いでいるボランティアサークル「くれよん」や、栃木県の工業高校生が中古の車椅子を修理して東南アジアへ贈る「空飛ぶ車椅子」の活動など4件だった。

それが、第4回目の顕彰では7件に増加し、山形県楯岡地区の「浅草寺の大草鞋」や、福岡県柳川の観光舟の船頭さんご夫妻による菖蒲園づくり、佐賀県佐野常民記念館における小中高校生によるガイドボランティアなどを取り上げた。とくに、「日本赤十字の生みの親」である

佐野常民の功績に感銘した地元
の若者たちが、記念館の展示の
ガイド役を引き受けて成果を上
げているという活動を取り上げ
たことは、たとえ社会的には広
く知られているという活動でな
くとも、長年にわたりそれぞ
れの地域において、地域に密着
した活動を展開している社会貢
献活動を取り上げていこう、と
くに、青少年の活動を大切にし
て掘り出していこうという茗溪
会の顕彰事業の方向性を決定づ
けるものとなった。

「混沌とした世相の下で、社会貢献活動をされておられる青少年の方々のうち、個人あるいは団体について、世の中を照らす光としてその活動を讃え、感謝の意を表するとともに広く世にご紹介する」と述べられた第1回目の顕彰式での鶴川昇理事長（当時）の言葉がここにきて全面的に実現することとなった。鶴川理事長が、「川の石を一枚ずつはがしてみなければ分からないような活動を発掘し、インパクトのあるものにしていこう」といわれたことも印象的だった。

この方向性は現在まで続いており、「私どもの顕彰事業も、社会貢献活動への働きかけのひとつにもなってきたかと思っています。社会貢献が生活の周辺にまで及ぶことで地域社会の質そのものが向上することが期待されます」と述べた第8回顕彰式での西野虎之介理事長の言葉は、この事業の積極性を表現したものであった。

これまでに顕彰でとりあげてきた事例をもう一度振り返り、各地で活動に関わった方々取材し、社会貢献活動への意見やお気持ちを伺いながら、茗溪会は、「いま、なぜ社会貢献活動を顕彰するのか」その意味を、ここで改めて問い直すこととしたい。

ターナー島の松再生に成功

地球規模での環境変化に対して、その保全に取り組む活動が行われている。顕彰で取り上げた中でも、愛知県の表浜ネットワークのウミガメ保護活動や北海道静内農業高校生徒の桜並木保全活動などがあるが、愛媛県の北岡杉雄さんの「ターナー島の松」を再生させた20年にわたる活動は、環境保全のための個人の努力という点で、印象深いものであった。

愛媛県松山市高浜港沖合500mにある四十島を、地元の人々は『ターナー島』と呼んでいる。北岡さんは、この島に自生していた松の再生に永年にわたり取り組んで来られた。

ターナー島と呼ばれたのは、夏目漱石が『坊ちゃん』の中で、島に自生していた松の姿が素晴らしく、「まるでターナーの絵のようだ」と書いたことによる（写真④明治35年）。ところがこの島の松が昭和50年代になって松食い虫の被害を受け、全滅。島はただの丸裸の岩礁になった。当時、愛媛県や松山市も有識者等を総動員し松の再生に取り組んだそうである。しかし、岩礁における松の再生は不可



明治35年



平成21年

能という結論に達し、そのまま放置されることになった。

この決定に疑問を持った人がいた。当時高浜小学校の理科担当教員の北岡杉男さんである。全くの孤立無援という状況の中、ターナー島の松の再生に取り組んだ。度重なる台風の被害、岩礁の崩落等自然災害を受け続ける中、およそ20年にも及ぶ試行錯誤の連続の結果、遂に松の再生に成功した。現在では二世の島生まれの松の生長も見られるようになっていく。(写真⑤平成21年)

北岡さんは次のように話している。

「誰に頼まれた訳でもない。どこからも財政的な支援もない。島に渡るには漁船をチャーターする必要があるが、教員の厳しい財政状況では思うに任せない中、二度ほどやむを得ず泳いで島に渡ったこともあった。県の有識者である農学博士の否定的な見解に対し、松のことは松に聞きましょう」と大論争を展開しながら取り組んだ以上、途中で辞めるわけにはいかなかった。苦勞の連続の二十年でした。」

ターナー島の松再生の成功により、瀬戸内海をはじめ、遠くは富山湾内の島など幾つかの島々において、松の再生活動に対する気運を喚起し、そのための指導、助言を続けた。

現在、氏の永年の努力の成果を受け、四十島を地域資源として活用したいという松山市からの申請が認められ、県から市に無償譲与された。その譲与式典には北岡氏夫妻は主賓扱いで招待された。島の松の保全対策については、北岡さんの助言をもとに松山市が主体となって対応するようになっていく。

顕彰の翌年、北岡さんは、茗溪会愛媛支部主催の文化講演会において『ターナー島の松 再生』をテーマに講演され、会員以外の参加者も含め、改めて地元の人々に大きな感銘を与えた。また、宇和島市の高齢者大学、地域の小中学校、さらには広島大学等において、講演、環境保全活動を精力的に続けておられる。

なお、四十島は名勝地のうち「再現することが容易でないもの」の基準を満たすと判断され、国の文化審議会から中・四国地方初の「登録記念物」として登録された。

伝統工芸を次世代へ受け継ぐ

伝統的な技能を次世代に受け継ぐために、地域で積極的に伝承活動をしている人がある。

茨城県の矢野洋一さん(第6回顕彰)は、本業の竹細工職として、長年にわたり培ってきた技術に、自らの創意、工夫を加え美術工芸作品の制作にも心血を注いでいる。昭和61年伝統工芸新作展に初入選以来、茨城県芸術祭においては最優秀賞を受賞(昭和63年)するなど、日本伝統工芸技術者としての地位を確立している。その緻密、繊細な技法を駆使した『網代華監』などの芸術作品は高く評価されており、重要文化財竹工芸部門伝承者としての研究にもとりくんでいる。

こうした実績をもつ矢野さんは、地元の茨城県桜川市においては市の社会福祉協議会の要請を受け、地域の高齢者を対象とする竹細工教室講師を十余年にわたり担当している。受講生の中からは、茨城県芸術祭に氏の指導を受けた作品を出品し優秀賞を受賞する人も出た。このような活動実績は地域の高齢者に新たな活力と生き甲斐を見いださせており、月2回の竹細工教室はしっかりと地域の支持を受け定着した。現役の工業高校の教員も特に参加を認められ、伝統工芸技術を次世代へ橋渡ししようとする機運も芽生えてきた。

また、矢野さんの活動の情報を得た行李作りの職に就いている青年が、更に技術向上を目指し、漆塗りの指導等を受けに来ている。その他、茗溪学園出身者2名を含めた3人が毎月2回のペースで、より高度の技術を身につけようと氏の自宅において指導を受けるようになっていく。こうした若い世代の人々の中にも伝統技術の伝承を志す気運が出てきていることは特筆に値するものである。



ぢろの会「伝統文化子ども教室」で

近年、各地の竹藪荒廃が大きな問題となっているが、作品の素材となる良質の竹材を確保する面からも、自ら周囲にも呼びかけ地元の竹林を整備するなど、里山保全にも尽力している。このことは地域の環境保全に大きな役割を果たしている。

この他、第5回顕彰の石川県の加門進さんは、指物師として木工建具「組子工芸」の技術を伝えるために、県内の職業訓練所や職人大学校などで講師を務める一方、内弟子をとって伝統を守る後継者を育てている。弟子には「折り目正しい生き方」をする中でこそ技能は修得されることを説く。

子どもたちが民話を語り継ぐ

地域に伝わる昔話や民話、方言や遊びを伝承していくという活動では、鹿児島県の「破魔投げ」保存活動(第5回顕彰)や、相模人形芝居の継承(第6回)などを取り上げたが、廃れゆく山里の暮らしや昔話の伝承に尽力されている倉富良枝さん(第5回)と、種子島の「ぢろ(囲炉裏の会)」(第7回)の活動を尋ねた。

まず「ぢろの会」副会長の下村タミ子さんからお便りを紹介する。

「一昨年、顕彰いただきました種子島の語り部「ぢろ(囲炉裏)の会」の活動について述べてみます。

会の発足は2007年の9月で会員は女性ばかりの4名です。種子島には沢山の民話、芸能がありますが、その民話も核家族

とテレビゲーム等に独占されて姿を消しつつあります。また方言も同じ運命にあります。むかし、囲炉裏を囲んで祖父母や父、母が語ってくれた民話を島の方言で伝え、

おばあちゃん先生と呼ばれる私



毎年10月になると小学校から電話があります。それは4年生の郷土学習の一環として、鹿野の郷土開発に貢献された岩崎想左衛門重友の偉業を子供達に話して欲しいという依頼です。岩崎想左衛門は今から350年余り前、鹿野の高台にある漢陽寺の裏山を3年の歳月をかけて用水の隧道を掘り、鹿野台地を豊かな耕地に開発された郷土の大功労者です。その隧道は「潮音洞」と称して、平成名水百選の一つにもなっています。

私がお子達に話してあげることは、業績のすばらしさだけでなく、昔の測量の仕方、掘削の道具とその方法や工夫などです。昔の人が岩場を掘った道具の「のみ」と「鎚」の実物を持参して子供達に持たせてみると、より実感を持って大変さが理解できたようでした。

洞窟の灯りには菜種油を木綿糸を束にした灯心に染みこませて燃やしたことや、鎚は鉄製で玄翁といっていたこと。玄翁鎚の由来となった玄翁和尚の伝説を話すとき子供達の目は輝いて、そのまぶしさを肌で感じました。

しばらくして学校からお便りが届きました。『おばあちゃん先生へ』、うれしいお便りです。

(倉富 良枝)

4年生の子どもたちの感想文から。

「おばあちゃん先生へ。この前は潮音洞の話をしてくださってありがとうございました。とてもわかりやすい説明でした。いちばんおもしろかったのは『げんのう』をもったことです。重かったです。岩崎想左衛門はこんな重いものをもって3年間をほったのですからすごいと思いました」「……私はつちを『げんのう』ということを知りませんでした。実物ののみとつちを見せてくださってとてもわかりやすかったです。『もっこう』が4年生の教室の前にあるなんて……。土地の高さのはかり方も初めて知りました。」



倉富さんの特別授業と子どもたち

この先も、私達の活動が少しでも浸透していつてほしいと願いながら、地道に活動が続けていきたいと思っています。地域の昔話をたくさん採集して、子どもたちに語り伝えようという活動が続いている山口県の倉富良枝さん(第5回顕彰)は元小学校教諭だ。いま、地域の小学校に毎年呼ばれて昔の話をするが、子どもたちからは「おばあちゃん先生」と慕われている。この子たちの両親も、さらにその親たちも、倉富さんの教え子なのだから、ほんとうの意味での「おばあちゃん先生」

残していききたいという思いからこの「ぢろの会」を立ち上げたのです。

毎月一回の活動になりますが、一年目は試みとしての語る会を種子島博物館の囲炉裏の間で子ども達と大人を対象に行いました。二年目は文化庁の助成金を受け、「伝統文化子ども教室」を開催し、子どもたちが語る民話の発表会を実施しました。三年目の今年は場所を赤尾木城文化伝承館「月窓亭」に移し、島の年中行事を再現しながら、毎月の語りのテーマに添って民話を選び、語るようにした子ども教室を計画実施しているところだ。

六人ですが、三年間欠かさず出席する子もいて、自分の好きな話を語ってくれるようになりました。また教室では、種子島に残る「申すことば」を大切にしたいと、始めの挨拶は「今日はめっかかり申さん」、終わりは、「ありがとうござり申した」を必ず使うようにしています。今では自宅でもよくこの挨拶を使う子もいます。このように私達は、笑顔で参加してくれる子ども達と触れ合い、毎回元気をもらっています。



下北沢の落書き消し隊

「大勢の人の集まるところはどうしても治安の悪化を招きやすい。自分たちの大切な街の防犯のために落書きやポイ捨てを放置していると、万引き、ひったくり、恐喝、薬物販売、傷害事件など凶悪犯罪にエスカレートしていきやすいので、落書き消し、ポイ捨て防止を重視した」と話している。

「落書き消し」活動で大切なことは、あきらめないこと。同じところに書かれたものを、そのたびに消すと四回目には書くほうが諦めて書かなくなること。そのためにも継続的な活動が大事だそうである。

東京の下北沢駅は、一日の乗降客が14万人あり、うち8万人は外部から来る人だという。その下北沢の街で「落書き消し隊」の活動(第8回の顕彰)を続けている下北沢南口商店会理事長の吉田園吉さんと副理事長の林大輔さんを、商店会事務所に訪ねた。

事務所には本会からの顕彰状をはじめ、警視庁・北澤警察署など多くの賞状が飾られていた。吉田さんが下北沢では10年前から始めた、おそらく我が国で最初に取り組んだ「落書き消し」活動だ。

安心の街へ、落書き消し隊

生」なのだ。その倉富さんの学校でのお話を紹介する(別掲)。

なお、倉富さんは昔話を地元の広報紙に連載して、一冊の本にもなった。その中の鬼の話が11月に岡山県総社市で開催される国民文化祭「民話の祭典」で紙芝居として演じられる。「そのことを光榮に思いますとともに、私には、語り継ぎ書き残す大事なお役目がまだまだありそう」と述べている。

この街に点在する劇場に集まる劇団員や大学生など若者にも参加を呼びかけて、毎月第三火曜日の午前中を活動日としている。活動は、あくまで民間人主体でなくては続かないという。下北沢でも、南口商店街(250店舗参加)以外の3つの商店街でも、同時にスタートしたが、今は休止している。それは区役所や警察が主体になって活動したため担当者が変わると続かなくなることが多いこれに対して、ここでは商店街の人が主体になって活動を続けているから長続きするのではないかと説明してくれた。

また、活動が長続きするために、「商店街だより」という組合内部の機関紙(A4サイズ8ページ)を時折発行して「落書き消し活動」の周知徹底を図っている。活動が経済的に負担にならないように、消すための水性ペンキや道具は区役所からの提供を受けている。「落書き消し活動」に参加してくれる外部の人にも、日ごろから音楽、演劇、美術作品の展示の場を提供するなどして、連帯感をもって接しているという。

このような取り組みによって、下北沢の「落書き消し活動」が成功を収めているのだと実感される。

障害者に社会参加を促す

障害者の社会参加を促す活動など、社会福祉に貢献する活動は、献身的なボランティア活動に負うところが多い。茗溪会がこれまで取り上げた活動は次のように多数にのぼっている。

第5回顕彰の上條貴子さんは、ボリビアに障害児対象の教室を開設し、現地の教育省に働きかけ公立の養護学校にまで発展させた。茨城県の土浦朗読の会(第7回)は、視覚障害者のために音声訳講習会や録音図書、声の広報などを発行している。高齢化社会をよくする虹の仲間・手作り工房(第8回)の活動は高齢者や障害者が手仕事を通じて社会とのつながりをもたせようとする活動だ。留学生のために携帯電話で通訳のサービスをしている愛伝舎の活動(第8回)、絵本づくりに献身している壁

谷芙蓉さん(第6回)の活動もある。埼玉県の臍帯血バンクを支える会・ライフサポート川越(第7回)の女性たちは、臍帯血のクローラーボックスを日大板橋病院へ搬送する活動を毎日続けている。

障害者自身による福祉活動としては、笠羽明美さんご一家による「ほのぼの寄席」(第8回)がある。地域のお年寄りの集まりやデイサービス、作業所の新年会など福祉施設を中心に「公演」を続けている。事故で片足を失った鈴木徹さん(第7回)が、パラリンピックで走り高跳びで活躍したことは社会に勇気を与えるものであった。

社会福祉のための活動の中でも、障害者の社会参加と就労の場を確保しようという、より積極的な活動を展開している人々がいる。

第3回顕彰で取り上げた茨城県の佐藤敬信さんは、定年を前に高校教諭を退職し、障害者のための授産施設「あすなろ学園」を創設、また結城紬やパン工房などの作業所を設立し、彼らの自立に尽くした。パン工房はいま地元で人気を集めている。

また、退職後私財を投じて就労の機会を提供する会社を設立して障害者の社会参加に貢献しているのが金子鮎子さん(第5回)だ。金子さんはNHKテレビカメラマン(女性第1号)在職当時から、精神障害者やその家族との交流を重ねるなかで、その置かれている環境の厳しさを知るようになり、退職後会社を設立した。

東京・高田馬場に事務所を構える金子さんの会社「ストローク」を訪ねてお話を伺った。金子さんは言う。「確かに精神障害者にはハンディはありますが、潜在的



「働くこと」をテーマに当事者、家族、雇用主などとの意見交換会で話す金子さん

な能力もあり、それを引き出すことによって、人間として生きていく力を身に付けてほしいと思います」

金子さんは、障害者とともに働く場として会社を立ち上げたのだった。ビルの清掃やダイレクトメールの発送作業を請け負うという仕事をしている。この会社設立に当たって、社会福祉法人ではなく株式会社としたのは、仕事に責任を持ち、社会的信頼も得やすく、自分で経営責任を持てるかたちをとるためだった。

「責任」は、障害者自身にも求められる。たとえば仕事に就く前に、清掃技術・技能について少なくとも数回の研修を受けてもらう。その受講料は有

料にしたこともあった。はじめ無料でやったが時間どおりに来なかったり無断欠席も。きちんと働く意識を持つてもらうための一つとして有料にしたそう。この研修をとおして、働く意識を持てるような指導も重視している。研修受講者はすでに200人近い。会社では現在16人の精神障害者が雇用されており、6人の訓練生と働いている。在職期間10年以上という人も7人にのぼり、また、就労時間も週30時間以上に及ぶものも何人かいるという。

障害者の就労をひろげることは、受け入れてくれる企業の協力や事業主との連携が大切である。協力のネットワークは徐々に拡大しており、北は青森から南の北九州まで、約20カ所までに広がった。

精神障害者に就労をすすめるこの会社の活動を支えていくために、一方でNPO法人「ストローク会」がある。理事長は堂本暁子さんと金子さんは副理事長。会は、「障害を持つ人々に対する地域社会の理解と協力」をめざし、あわせて「メンタルヘルスへの啓発」を図るという目的である。就労実態のDVD作成や、障害者どうしの日曜サロン、障害者の家族の集いなどを企画実施している。

高校生・大学生の場合

若溪会の顕彰事業では、青少年の社会貢献活動を取り上げることを中心に据えてきた。高校生や大学生は、「社会のために役立つ」という活動をどのようにとらえているのか、そのとらえ方を聞いてみた。

第1回の顕彰で取り上げた山形県西川町のボランティアサークル「くれよん」は、地域の学校の枠を超えて中高生がサークルに参加し、小学生など子どもたちに対する放課後指導や子ども会指導、成人式、駅伝などイベントごとにも活動している。「くれよん」は始まってすでに20年以上、子どもたちの間で代々受け継がれ、この町の「町づくり」に重要な役割を果たしている。若溪会の顕彰式に出席した高校生、当時の代表・和賀 光さんは、自分の住む町が今まで以上に好きになり、町を離れることなく、現在では青年団活動など地元の活動を続け、「よりよい町づくりを目指しています」と、高校生時代の活動を振り返っている（左掲）。

過疎の町で世代をこえて



私が「くれよん」を卒業してから8年が過ぎますが、私は、高校時代のあの活動を通して自分の住む「西川町」を今まで以上に好きになり、生涯この西川町で暮らしていきたいと感じました。それは、くれよんでのボランティア活動で、自分の中でいくつかの変化があったからです。その中でも一番大きかったのは、世代を超えた繋がりができた事です。小学生を対象とした活動で知り合えた子たちが、現在では中学生、高校生になり部活動や学校行事で輝かしい活躍をし、元気に成長している姿をみせてくれます。時々顔を合わせた際には、「光君！あんどぎの（くれよんの時の）遊びおもしろいっけよ〜！」と、笑顔で話してくれます。もし、私が西川町を離れていたらこの喜びは味わえません。まさに「西川町を離れないでよかったな〜」と感じる瞬間です。現在私は、地元の高齢者施設に勤務しています。利用者様への生活の援助、ふれあいを通じ、これまで西川町を支えてくださった方々からの話を聞き、今と昔とで変わったところの話をするのがとても楽しい時間です。また、私の地域の活動としてくれよんで得た事を生かすべく、現在では消防団、公民館、青年団活動に参加し、子どもからお年寄りの方まで幅広い世代の方々と協力し、楽しくよりよい町づくりを目指しています。

「くれよん」が、自分の子どもの世代まで続く「モンスターサークル」になってもらえたら最高です。
(西川町ボランティアサークル「くれよん」
平成14年度代表 和賀 光)

そんな私たちの想いを受けとめてくれた行政・流通・加工・サービス業・生産者団体・消費者団体などの方々により平成16年に湘南ヤココン応援団が設立されました。その年の11月には平塚市の市民プラザで第1回湘南ヤココンフェアが開催され、今年は7回目の開催が予定されています（第2回は全国ヤココンサミット）。

ヤココンの知名度は活動当初と比べると上がったものの、普通の野菜としてスーパーに並んでほしいと考えていた私たちの想いと比べるとまだまだの状況です。しかしヤココンを使った商品の中でヘルシー和菓子の「ヤークン」や「湘南ヤココン焼酎」は平塚市の推奨品となり、今でも販売されていることはたいへんうれしいことです。また年に数回ですが食育の一環として小学校の給食に導入されるなど、後輩たちの活動の成果を誇りに思います。そして私の7つ違いの妹がヤココンの活動がしたくて入学し、一生懸命に活動してくれていることは個人的にうれしく感じています。これからは卒業生として協力したいと思っています。」

筑波大学のライフセービング部（第6回顕彰）は、大学生の社会貢献活動として出色である。毎年夏には茨城県大竹海岸で、監視・救助活動を中心とした海水浴の安全管理、応急手当、海辺の美化などの活動が続いているだけでなく、シーズンオフには、地元の子どもたちを集めてライフセービング教室を開いているが、現役部員の川俣牧子さんは、「社会に貢献できた以上のものが、自分の経験や能力となっていくのではないかと思います」と、活動からの確かな手応えを語っている（右掲）。

平塚農業高校で始めた高校生による「ヤココン」の栽培と普及活動を、第5回顕彰で取り上げた。

この活動は、地域産業の発展、ひいては町おこしに大きく貢献した事例である。

卒業生の山田智美さんは、10年を振り返ってこう語ってくれた。

「平成13年に平塚市で南米アンデス原産のヤココンの栽培普及の活動を始めて今年でちょうど10年になります。怖いもの知らずの農業高校生が、高齢化や後継者不足などの問題をかかえる農家を元気にしたいという単純な発想で始めた活動でしたが、

夢中に打ち込める活動



ライフセービングとは、簡単に言えば「海辺での安全を守る」活動です。活動のメインともいえるのが海水浴場での監視救助活動になります。ただ、「おぼれたら助ける」のではなく、「事故を未然に防ぐ」ことを目指すこの活動の上では、人との「会話」が一番重要なポイントとなります。

ライフセーバーの活動には、まったくかかわりの無い、およそ自分とは共通点も見当たらないような人と話すという状況が頻繁にあるわけです。もちろん、それまでのコミュニティ内での話し方では通用しませんから、工夫が必要になってくる。自由に遊びたい遊泳者にとって、ライフセーバーは自由を制限する厄介者。それを踏まえた上で、どんな伝え方をしたら気持ちよくルールを受け入れてもらえるのか、私たちはこの課題を常に抱えています。もちろん、答えはひとつではありません。

こうした工夫の積み重ねの結果、すべての遊泳者の方に「楽しかった」と気持ちよく帰ってもらえたら、少しは社会に貢献できたことになるのかもしれない。

常に、自分の損得だけでなく、相手の立場で考えること。社会に出れば当たり前のことかもしれませんが、学校や家庭というコミュニティを離れたこの活動をとおして、強く意識するようになりました。

社会貢献活動と呼ばれるものは、きっと多くのひとのかかわりを持つ活動なのではないでしょうか。そこでたくさん壁にぶつかり、そのつど考え、工夫を凝らすことで、社会に貢献できた以上のものが、自分の経験や能力となっていくのではないかと思います。

先日、2010年度の監視救助業務が無事終了しました。4年間を振り返れば、苦労のほうが多かったようにも思いますが、そのぶんやりきったという充実感はひとしおです。学生のうちに夢中に打ち込める活動を見つけられた自分は、幸福者です。

(筑波大学ライフセービング部 川俣 牧子)

ボランティア活動の新しい方向

学校と社会の連携

高校生などがボランティアなど社会貢献活動に参加できるようにするために、学校などが取り組んでいる新しい方向がある。その一つが「学社連携」である。

第1回顕彰で取り上げた、栃木工業高校の国際ボランティア活動はすでに10年を超える実績を重ねている。工業高校生が修理した車いすを海外へ寄贈する「空飛ぶ車いす活動」や、タイ王国を訪問し車いす修理を通して現



タイ（カンボジア国境に近いサケオの街）で、自転車修理のボランティア活動による国際交流（栃木工高）



地の人々と交流する「国際交流タイボランティア活動」に参加した生徒は、240名を超え、高校生の実践活動として、各方面より、高い評価と称賛を受けている。この活動を指導してきた小倉幹宏教諭（現宇都宮工高校）は、次のように述べている。

「『さあ実践してみよう！地域と世界をつなぐボランティア活動』といっても、田舎の一工業高校の力だけでは何もできません。この活動は、国内の支援団体や、海外での活動をサポートしてくれる現地スタッフの存在があつてこそ成り立つものです。これは、長年継続することと得られた宝物であり、私たちはこれらの皆様に、感謝の気持ちを忘れてはなりません」

栃木工高のこの活動は、全国の工業高校へ拡大して、参加校は65校にもなっている。送り先の国も、タイの他、インド、スリランカ、韓国など12カ国にも増えている。このような広がりを可能にしたのは、（財）日本社会福祉弘済会など多くの福祉関係団体やサイクル運動団体との、さらには航空会社との連携・協調があり、学校と社会の協力体制、いわゆる「学社連携」の成果であつた。

小倉教諭は、今後の課題についてつづける。

「しかし、これからの活動を実践するに当たっては、数々の問題も発生しています。受け入れ国の治安や情勢、現地スタッフの確保、活動資金の捻出などです。その中で一番の問題は、この活動を継続・実践してゆく指導者を育成することでしょう。しかし、この活動は若者たちに広く世界を観て感じることができる感性と実践力をはぐくむことのできるすばらしいネットワークです。私たちはこのネットワークをさらに育てていこうという思いです。」

サービスラーニング

高校生や大学生が、社会に貢献する活動によって「感性と実践力をはぐくむ」ことを、教育の中に位置づけて組織的にすすめるようにする活動が、「サービスラーニング」と呼ばれる方向である。

第7回顕彰で取り上げた神奈川県逗子高校では、隣の学校と連絡し合いながらボランティア活動をすすめるために、名称も「サービスラーニングセンター」とする連絡組織を設立した。センターを総括している松本一彦教諭は、高校生のボランティアの状況について次のようにコメントしている。

「高校では、学業（授業部分、ゆとり教育から転換による増加）、課外活動（部活動）のウェイトに加えて、昨今の経済状況から各家庭の収入減少によるアルバイトの増加が見られる。このため以前より生徒の地域と連携した各種活動の機会は減っている。本分野に社会貢献活動やボランティア活動も含まれる。

本来的には欧米で見られる、学びと社会貢献活動が連携し、カリキュラムベースに設定される「サービスラーニング」の実施が好ましいが、日本では体験的学習の成果が大学入試等と連携できていないことや教師の未経験から実施されている例は少ない。

特に最近顕著な傾向は、前記の経済的な状況から仕事と直結した医療・福祉分野で、進学と連携したボランティア活動の例である。この場合は側面的にはキャリア体験の意味を持つ場合が多い。

ボランティアの推進には

- ① コーディネート可能な核となる生徒の育成。（本校ではNPOと連携した高校生公益活動リーダー塾を開催）
- ② 社会貢献活動に対するポイント性の導入等、多様な角度から社会全体が認知・評価することが必要と考える課題として、特に教育現場を中心に同活動に対する評価（数値的なものを含む）に対するマイナスイメージの強さが根強いことである。」

高校生のサービスラーニングを実現していくのに、克服すべき障害はまだ多いようであるが、若者の社会貢献体験をすすめるためには、注目すべき方向性ではないだろうか。

茗溪会顕彰は今年9回目を迎える。これまでの顕彰を振り返りつつ、さらなる社会貢献活動を発掘していくために、現在作業中である。

茗溪学園だより

茗溪学園の部活動

本校では、部活動が盛んです。そして、高い実績を誇っています。今年度も、運動部では三つの部がインターハイに、二つの部が全国中学大会に出場しました。文化部でも全国高文連大会出場など、活発に活動しています。そこで、少し詳しく本校の部活動を紹介いたします。

本校には、運動部12、文化部12、同好会6の団体があり、今年度の部・同好会所属率は91%(運動部54%、文化部31%、同好会6%)です。部員の多い人気の部は、吹奏楽部(130人)とラグビー部(103人)となりますが、男子のみで百人を超えるラグビー部は、全国大会出場17回の実績が生徒を惹きつけていると言えます。続いて、部員も多く高い実績を残しているのは、運動部では、テニス部(94人)、バドミントン部(79人)、体操部(60人)、剣道部(56人)、軟式野球部(55人)です。文化部では、書道部(80人)、美術部(49人)、室内楽部(42人)、演劇部(36人)などが活発で優れた実績を残しています。科学部(68人)

は、物理、化学、生物、地質、天文、無線工学の6つの班に分かれてそれぞれに活動していますが、対校試合が行われる無線工学班は、アマチュア無線全国大会で何度も優勝しています。

他に、運動部は、柔道、バスケット、バレー、サッカー、卓球、水泳があります。運動部では、筑波大学の体育の院生や学生にコーチをしていただいています。大学のサポートがあることが本校の特徴、恵まれたところだと思います。文化部は、合唱、ギター、地歴、写真、文芸、語学があります。同好会は、茶道、ボランティア(インターアクト)、ダンス、イラスト、落語、ゴルフとなっています。

各部による国際交流も行われています。今年3月には科学部、語学部、ラグビー部が台湾を訪問し「淡江高級中学」(台湾の私立の中高一貫校)と交流してきました。ラグビー部は、オーストラリアやニュージーランドの学校が来日した時に交流試合をしています。本校の生徒達は、部活と学業と両立させています。平



吹奏楽部・定期演奏会(つくば市・ノバホールにて)
バドミントン部(1回戦を突破しガッツポーズ)

※今年度の活動実績(4月～8月)※

◎全国大会

- (1) 全国高校ラグビー選抜大会(4月)=予選リーグ・グループ2位、決勝トーナメント(ベスト8以上)進出ならず
- (2) 沖縄インターハイ出場 ①バドミントン部男子団体=1回戦突破 ②テニス部女子シングルス=1回戦まで 女子ダブルス=ベスト16 ③体操部男子個人1名(125位)、女子個人2名(77位-3年連続出場・今年こそ決勝進出を狙っていたが届かず、101位)
- (3) 全国中学大会 ①剣道女子団体=ベスト16、個人=ベスト16 ②水泳=全国31位、全日本ジュニアオリンピック大会出場 ③バドミントン女子シングルス=全日本ジュニアオリンピック大会出場
- (4) 千葉国体出場 茨城県選手として関東ブロック大会を突破、千葉国体(10月開催)に出場。ラグビー部員10名、体操部員2名
- (5) 全国 ARDF 大会(アマチュア無線の大会)

◎世界大会 ARDF 世界選手権大会出場(9月)クロアチアで開催されるアマチュア無線の世界大会へ日本代表女子選手として出場

◎関東大会 高校⇒ラグビー部(3位)、バドミントン部(男女)、体操部(男女)、テニス部(女)、軟式野球部(準優勝)、水泳部
中学⇒剣道部(女子、準優勝)、ラグビー部、バドミントン部、体操部、テニス部、水泳部

◎文化 ①美術部=全国高文連大会(宮崎県開催)に茨城県代表として出場、その他全国レベルの作品展に出品・上位の賞を受賞
②書道部=全国高文連大会(宮崎県開催)に茨城県代表として出場、その他全国レベルの作品展に出品・上位の賞を受賞 ③吹奏楽部=定期演奏会・ノバホール(8月)

平成23年度 生徒募集について

平成23年度の生徒募集活動は、11月21日アジア4都市と北米での海外現地入試「海外生特別選抜試験」から始まりです。

12月20日 中学推薦入試、高校海外枠入試
1月9日 中学一般入試、高校推薦入試
1月29日 高校一般入試(海外枠入試を含む)
となっています。

今後の広報活動としては、11月6日に学園説明会を予定しています。お知り合いの方にご紹介いただければ幸いです。

募集要項など入試に関わるお問い合わせは、本校の入試担当および広報担当にメールなどでお寄せください。メールアドレスは、kouhou@meikei.ac.jp(見学等)

entry@meikei.ac.jp(入試等)

葛飾支部勉強会から

春の訪れが足踏みする寒い中、熱心な会員の勉強会がありました。そのごく一部を下記にお知らせ致します。

茗溪会 葛飾支部主催 2010年3月7日(日)

於…茗溪会館 14時～17時

プログラム 「食育活動の実践について」

……葛飾区内における実践を例にして……

14:00～ご挨拶

葛飾支部長 東京聖栄大学 渡邊 悟

14:10～葛飾区の食育推進計画の概要

葛飾区保健所健康推進課 藤野 秀市

14:50～都立農産高校における食育活動の実践

前農産高校長・現稔ヶ丘高校長 徳田 安伸

15:30～東京聖栄大学における食育活動の実践

東京聖栄大学 新村真由美

16:30～ディスカッション

コーディネーター
実践女子短期大学 白尾 美佳



講師・ゲストの先生方 左から白尾、中野、新村、徳田の各氏

葛飾区食育推進計画は、区民一人ひとりが「食べることは心身ともに健康で豊かに生きるための基本であること」を心に刻み、食と健康に関する正しい知識を習得して、より良い生活スタイルを確立し生きる力を育む」ことを目指すという基本理念に基づき具体的な計画の目指す方向性についての詳細なお話でした。下町人情が残る「葛飾らしさ」を大切に事業が展開されており、地域特性を生かした内容で、食育の推進体制が区民と区が協働して推進されている状況の貴重なご報告でした。

「農産高校における食育」の取り組みは徳田安伸校長の強力なリーダーシップの下で、多くの興味深い取り組みが行われております。「食と緑の学園」という掛け声で全校一丸となった「農産」

の使命は、農業人・産業人の育成であり、食と緑の文化を目指す学校行事が年間を通じてたくさん計画されております。

農産高校の素晴らしいところは日々の授業が食育の学校として展開されており、学びを学びで終わらないという学校生活が365日食育の展開と関連させております。農産高校ならではの、他に例を見ない素晴らしい取り組みです。

東京聖栄大学の新村真由美先生は、葛飾区保健所健康推進課と共同で地域に根差した食育の取り組みを紹介されました。「かつしか知っ得メモ」と称したパンフレットを授業のカリキュラムの中で学生が作成し、大学周辺の協力が得られる地域商店に置いてもらい、地域住民に食育情報を提供する取り組みがなされております。

これは大変ユニークな取り組みで、管理栄養士を目指す学生の将来に向けた社会的実践の一例となり、特色ある大学教育の一環が紹介された内容でした。

最後にコーディネーターの白尾美佳先生により全体をまとめていただきました。

白尾先生は、日野市における食育の取り組みのなかで、実践女子短期大学の学生と共に取り組んでいる内容を紹介されました。

日野市における伝統的な「陸稲」の生産を農家の人達の指導を受け、短大生が栽培に取り組み地産地消の食育体験をする、というお話を頂きました。また、収穫後はバザー展を開催し、地域の人達と「陸稲」の試食会を行い、この町おこしの一助につなげた食育の活動は、大変な苦労の中にも心温まる気持があり大変興味深いものでした。

全体をとおして感じたことは、指導者の背後には、数え知れない、また、多くの人達の日々の努力が隠されていると思いますが、豊かな人間性の中に食育の重要性が実現していくのである、ということでした。

葛飾支部長 渡邊 悟 (56筑二農・62筑博農)